



2019年度 第2回 瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
瀬戸内海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2019年7月～8月)のポイント

(1) 概要：

シラスの漁獲量は平年を下回る。カタクチイワシ（小羽から大羽）は平年を下回る。

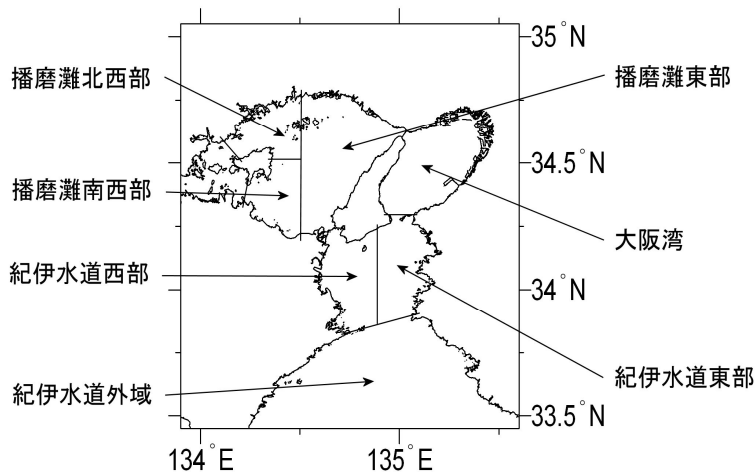
(2) 海域別：

紀伊水道東部・紀伊水道西部・播磨灘東部のシラスは不漁であった前年を上回るが、平年を下回る。

大阪湾・播磨灘北西部のシラスは不漁であった前年並み。

播磨灘南西部のシラスは平年並みであった前年を下回る。

大阪湾のカタクチイワシは不漁であった前年を上回るが、平年を下回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所

担当：業務推進部 加藤、河野

資源生産部 本田、河野

電話：0829-55-3406、ファックス：0829-54-1216

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2019年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

1. 今後の見通し（2019年7月～8月）

シラス（本年夏季発生群）

紀伊水道東部・紀伊水道西部・播磨灘東部では不漁であった2018年を上回るが、平年を下回る。

大阪湾・播磨灘北西部では不漁であった2018年並み。

播磨灘南西部では平年並みであった2018年を下回る。

標本漁協、もしくは標本船のシラス漁獲量を各海域の指標とした（図1～図3）。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では不漁であった2018年を上回るが、平年を下回る。

標本船の漁獲量を指標とした（図4）。

シラス、カタクチイワシのいずれも2009年～2018年の平均値を平年値とした。

2. 漁況の経過（2019年4月～6月）及び今後の見通し（2019年7月～8月）についての説明

(1) シラス漁況

紀伊水道東部（和歌山県側）では5月の漁獲量は前年の88%、平年の144%であった。

紀伊水道西部（徳島県側）では5月の漁獲量は前年の70%、平年の107%であった。

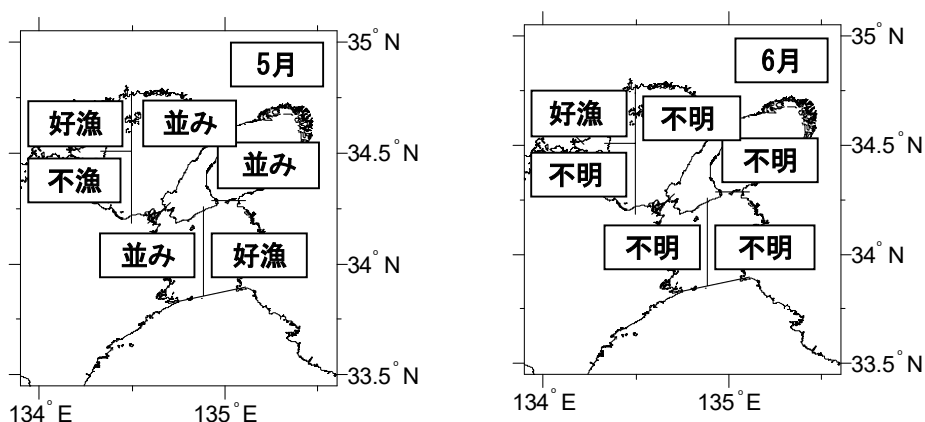
大阪湾（大阪府）では2019年の漁は前年より約1週間早い、5月7日から始まった。5月の漁獲量は前年の90%、平年の88%であった。6月上旬以降、漁獲量は増加傾向である。

大阪湾（兵庫県）では2019年の漁は前年より7日早い5月7日から始まった。5月の漁獲量は前年の109%、平年の116%であった。

播磨灘東部（兵庫県側）では2019年の漁は前年より8日早い5月24日から始まった。5月の漁獲量は平年の88%であった（前年5月は漁獲なし）。

播磨灘南西部（香川県側）では2019年の漁は前年より1日遅い5月23日から始まった。5月の漁獲量は前年の71%、平年の62%であった。

播磨灘北西部（岡山県側）では2019年の漁は前年より9日早い5月27日から始まった。5月の漁獲量は平年の175%であった（前年5月は漁獲なし）。6月の漁獲量（6月1日～12日までの合計）は前年の169%、平年の156%であった。



2019年5月～6月のシラス漁況

(2) 産卵量

紀伊水道外域の東側では5月は前年の261%、平年の16%であった。紀伊水道東部では5月は前年の8%、平年

の8%であった。大阪湾では5月は前年の24%、平年の62%、6月は前年の228%、平年の62%であった。播磨灘では6月は前年の1250%、平年の36%であった（図5）。播磨灘東部では6月は前年の2588%、平年の67%、播磨灘北西部では前年の83%、平年の8%であり、播磨灘南西部では6月は平年の12%であった（前年採集なし）。

(3) 黒潮流路の現況と今後の予測

6月14日現在、黒潮は大蛇行流路で推移しており、都井岬沖と足摺岬沖でやや離岸、室戸岬沖と潮岬沖でかなり離岸している。各岬における黒潮離岸距離の変動傾向と水産研究・教育機構運用の海況予測システムFRA-ROMSの予測結果を併せて考慮すると、紀伊水道沖の黒潮は6月後半から8月までは、蛇行の移動に伴い一時的に接岸することはあるものの、概ね離岸傾向で推移すると予測される。

(4) 今後の見通し

シラス（本年夏季発生群）

紀伊水道東部では外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推定される。本漁期に黒潮は離岸傾向で推移すると予測されている。また紀伊水道東部及び紀伊水道外域東部における産卵は低水準である。大阪湾での6月の産卵量は2018年を上回っているが平年を下回っており、不漁であった2018年を上回るが、平年を下回ると考えられる。

紀伊水道西部でも外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推定される。7月～8月の漁獲量は6月の紀伊水道西部と播磨灘（徳島県海域）の水温が低いほど多くなる傾向があり、播磨灘（徳島県海域）よりも紀伊水道の影響が大きい（図6）。紀伊水道西部における10m層の平均水温は2018年より高め（+1.0℃より高く、+1.5℃以下）で平年並み（-0.5℃以上、+0.5℃以下）、播磨灘（徳島県海域）では2018年よりかなり高め（+1.5℃より高い）で平年より高めであった。また大阪湾や播磨灘での6月の産卵量は2018年を上回っているが平年を下回っていることから、不漁であった2018年を上回るが、平年を下回ると予測される。

大阪湾では外海発生群が春から引き続き漁獲されるのに加え、内海発生群が6月以降にシラスとして漁獲されるようになる。黒潮は離岸傾向が続くと予測されていることや紀伊水道東部及び紀伊水道外域東部における産卵状況から、今後の外海発生群の漁獲はあまり見込めない。また大阪湾での5月～6月の産卵量は平年を下回っていることから、不漁であった2018年並みと考えられる。

播磨灘東部では内海発生群が漁の主体であり、6月の水温が低いほど7月～8月の漁獲量が多くなる傾向がある（図7）。播磨灘全体での6月の水温は2018年より高めで平年よりやや高め（+0.5℃より高く、+1.0℃以下）であった。また産卵量は2018年を上回っているが、平年を下回っている（図5）。したがって不漁であった2018年を上回るが、平年を下回ると予測される。

播磨灘南西部も内海発生群が漁の主体である。周辺海域の産卵状況から、平年並みであった2018年を下回ると考えられる。

播磨灘北西部も内海発生群が漁の主体である。周辺海域の産卵状況から、不漁であった2018年並みと考えられる。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では漁期当初に2018年発生1歳魚、その後は2019年の春シラス漁で漁獲の対象となった0歳魚が小・中羽として漁獲される。大阪湾の2019年1月～4月における1歳魚の漁獲量は2018年を上回ったものの、近年では2018年に次いで少なかった。また2019年の春シラス漁では5月の漁獲量が平年並みであったものの、カタクチイワシシラスの割合は2018年より低く、外海発生群の来遊量は2018年と同様に少なかったと推察される。これらのことから不漁であった2018年を上回るが、平年を下回ると考えられる。

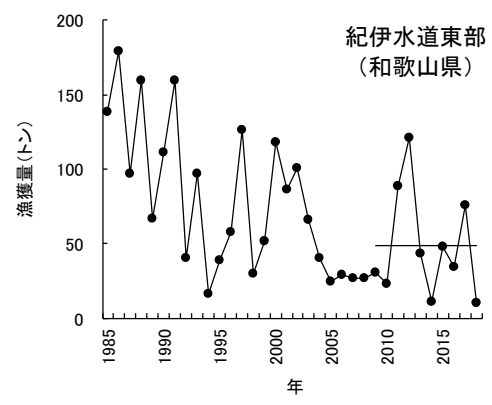
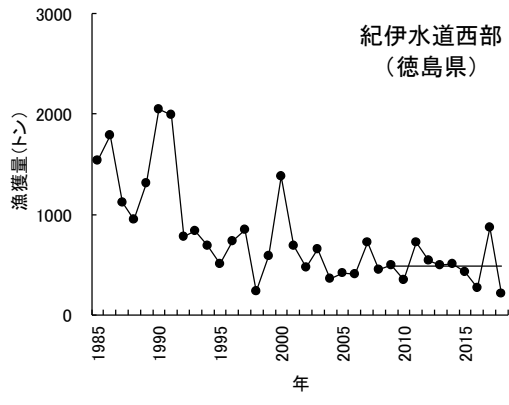


図1 紀伊水道の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

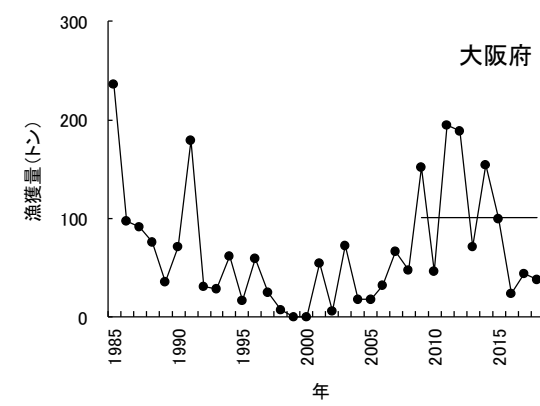
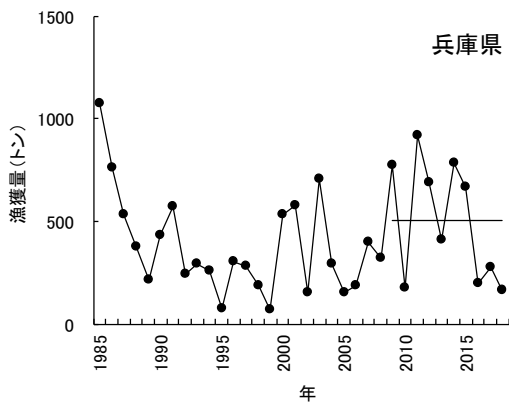


図2 大阪湾の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

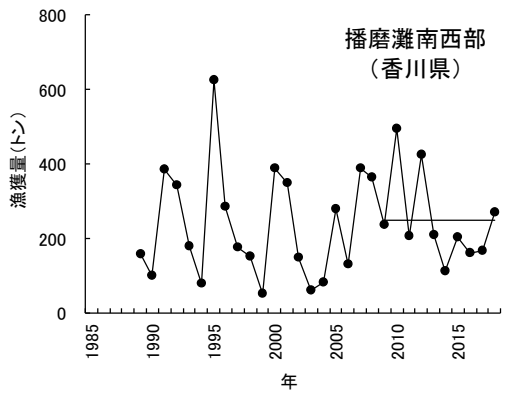
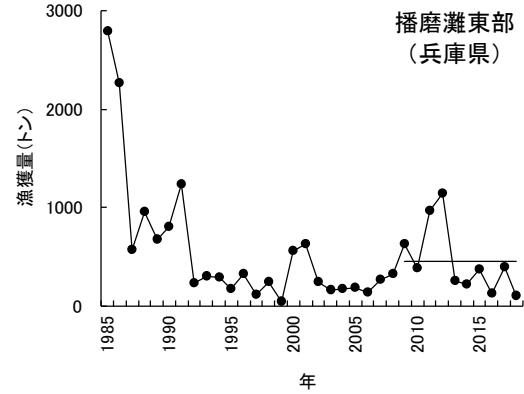
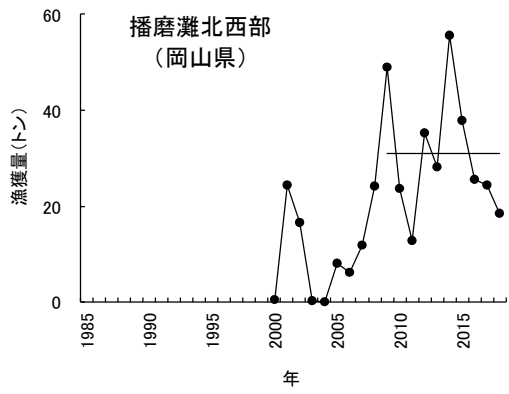


図3 播磨灘北西部の標本船、東部及び南西部の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

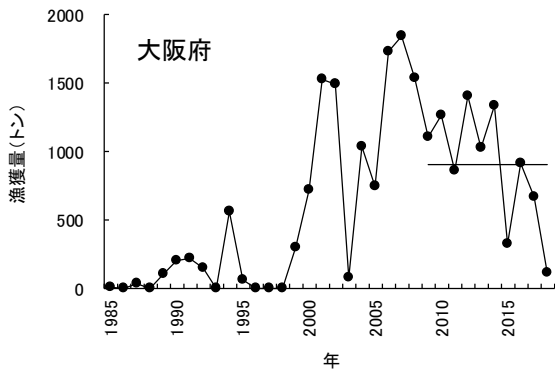


図4 大阪湾の標本船における7月～8月のカタクチイワシ漁獲量（実線は平年値）

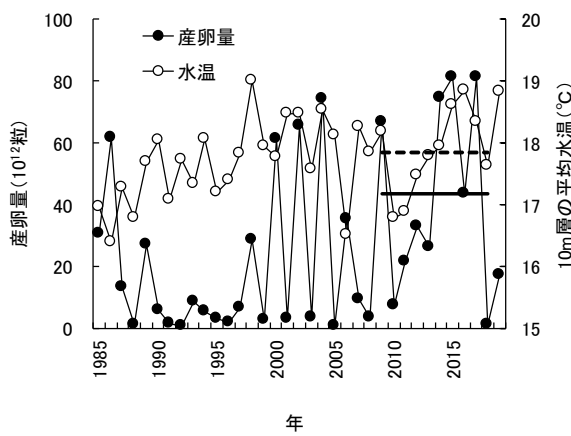


図5 播磨灘における6月の産卵量と10m層の平均水温（実線は産卵量、点線は10m層の平均水温の平年値）

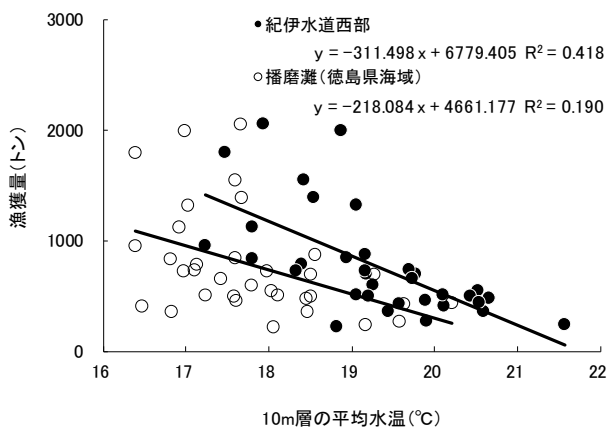


図6 紀伊水道西部及び播磨灘（徳島県海域）における6月の10m層の平均水温と紀伊水道西部の標本漁協におけるシラス漁獲量の関係

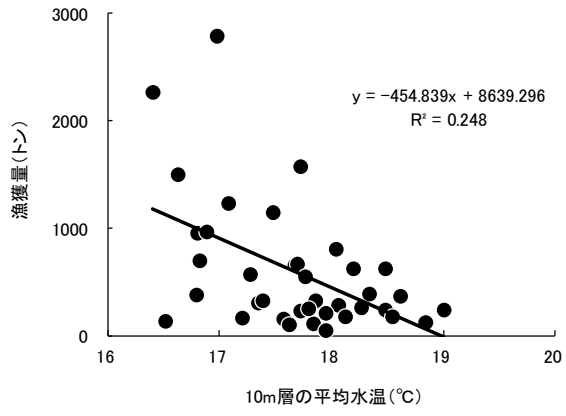


図7 播磨灘の6月における10m層の平均水温と播磨灘東部の標本漁協におけるシラス漁獲量の関係

参 画 機 関

<p>和歌山県水産試験場</p> <p>地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター</p> <p>兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター</p> <p>岡山県農林水産総合センター水産研究所</p> <p>香川県水産試験場</p>	<p>徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課</p> <p>国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所</p> <p>(取りまとめ機関)</p> <p>国立研究開発法人 水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所</p>
--	---